

## 七、高尾薬師伝説

### 焼薬師さま

若杉山の麓に高尾というところがあり、そこには小さな祠が二つひつそりと建っています。平安時代のはじめころ、この付近には若杉六寺の一つが建立されていました。その祠の一つに全身が焼けて顔の様子も分からなくなつた木の薬師さまがまつられています。

この薬師さまの例祭は七月七日(旧暦六月七日)で、毎年このころになると信者の人たちが団子をつくりお参りします。この薬師さまは目の病気に効くとみえて、祠の中には「め」の字を書いた紙が何枚も貼られているそうです。元来薬師さまは薬師如来といい、その手には薬壺を持ち、病を治す神様であるといわれています。

この薬師さまには二つの伝説が、今なお語り継がれています。

若杉山に大火があつたときでも運良く難を逃れることができたそうです。それ以降、二人は薬師さまへの信心をより一層厚くしたそうです。

### 取られてしまつた若杉の温泉

もう一つの伝説は、温泉にまつわるお話を。

その昔、若杉山には「湯屋原」という所に僧の浴場があり、庶民も湯治をしていました。

この薬師さまはじつは賭け事が大好きで、あるときよせばいいのに、二日市の武藏寺の薬師さまと賭け事をし、若杉山の温泉をまんまと取られてしましました。そのおかげで若杉山の温泉が枯れ、武藏寺に温泉(二日市温泉)が湧き出たといわれています。今でも若杉山の地名に「湯ノ谷原」や「風呂谷」の名を示す場所があります。



かつて靈峰若杉山には三百余りの僧坊(寺院内にある建物)が建ち並んでいた時代がありました。ある日、左谷と右谷の僧がちょっとした話の食い違いがもとでけんかになり、各地に火を放ち若杉山すべてを焼き尽くすほどの大惨事にまでなつたといわれています。

ちょうどそのころのある夜、若杉村の治右衛門と彦市の二人は、薬師さまが火に襲われている夢を見ました。これは正夢に違いないと思い、二人は起きるや否や薬師さまがまつられている祠まで急いで行きました。すると祠はすでに真っ赤な炎に囲まれており、近づくのもままなりません。

しかし、信者でもある二人は必死の思いで炎の海に飛び込み、祠の中から薬師さまを抱きかかえ、近くの渓流にくすぶつっていた薬師さまを浸して火を消しました。そのことがあって以来、村人はこの薬師さまのことを焼薬師さまと呼ぶようになりました。

さて、薬師さまを助けた治右衛門と彦市はその後、